

研究代表者	所属学系・職名 心理学系（旧人間・心理学系）教授 氏 名 鶴 卷 正 子
研究課題	発達障害の幼児間および母子間の関係形成に及ぼす影響の実践的検討と調査研究 Study on Developmental Support of Fukushima University to the Preschool Children with ASD.
成果の概要	<p>1. 研究の背景と目的</p> <p>福島大学プロジェクト研究所「発達障害児早期支援研究所」は2009年6月に設立された。本研究所の中心活動の場は、2002年より地域貢献事業として当時の福島大学教育学部特殊教育研究室（昼田源四郎，松崎博文，鶴巻正子）が開始した「つばさ教室」である（昼田ら，2008）。つばさ教室は自閉症スペクトラム障害（ASD）を中心とした発達障害幼児に小集団で早期支援を1年単位で実施している。本研究は、平成26年度つばさ教室に参加する親子のそれぞれの発達ニーズに応じた支援とともに、発達障害の幼児間および母子間の関係形成に及ぼす影響を実践的に検討することを目的とした。</p> <p>2. 方法</p> <p>(1) つばさ教室の実施概要</p> <p>平成26年度は15回の教室とボランティア参加学生の教材準備及び事後検討会7回の計22回を実施した。幼児と母親が5組，年間を通して参加した。学生スタッフは7名で，研究代表者・分担者のほかに研究員からも指導を受ける機会を毎回有し，本教室は教育実習前の学生指導としての性格も備えていた。</p> <p>各回の行動分析と結果の記録とともに，幼児教室の結果はビデオ分析により幼児間の関係形成を明らかにする。母親と幼児の関係形成については年間計画終了後の調査により明らかにする。</p> <p>(2) 研究組織</p> <p>本研究を進めるにあたり平成26年度より発達障害児早期支援研究所組織を以下のように発足させた。</p> <p>研究代表者：鶴巻正子（全体統括，幼児教室） 研究分担者：高橋純一（親教室） 研究員： 朴 香花（幼児教室，学生指導） 山崎康子（親教室，学生指導） 鈴木裕美子（附属特別支援学校校長，福島大学人間発達文化学類教授） 神野 與（附属特別支援学校副校長） 五十嵐育子（附属特別支援学校教諭，発達相談室「けやき」担当） その他，発達相談や支援にかかわっている附属特別支援学校教諭</p> <p>3. 研究成果</p> <p>本研究は，福島大学発達障害児早期支援研究所の活動内容のうち自閉症スペクトラム障害（ASD）のある幼児を中心とした「つばさ教室」（幼児教室，</p>

成果の概要

親教室)の実施、及び附属特別支援学校発達相談室「けやき」との連携にもとづいてすすめた。

(1)「つばさ教室」(幼児教室)

発達障害、特にADS傾向を有する幼児は、その診断基準からも明らかなように他者とのコミュニケーションを形成することに困難を抱えている。平成26年度つばさ教室(幼児教室)ではこの幼児間の関係形成を実践的に検討するために、「ごっこ遊び」の実施とその行動観察を、年間を通して行ってきた。月別の内容と準備したおもな手作り教材、購入物等は表の通りである。なお、幼児教室は1回あたり90分のプログラムで、このようなごっこ遊びのほかに、運動遊び、手遊び、絵本の読み聞かせ、個別課題などを含むが、それらの詳細については本稿では省略する。

年間の幼児教室をとおし、幼児間に次のような姿の変化を見ることができた。

○教室開始当初:

幼児はそれぞれ、興味のある遊具(ブロック、自動車、旗など)を使って一人で遊んだり、スタッフ学生に声をかけてもらうことでそれらの遊具を使用したりできるなどの姿がみられた。通院幼稚園が同じだったり主治医が一緒だったりして顔見知りであっても、幼児が複数人集まったり役割を持って一緒に遊ぶ様子はほとんど見られなかった。

○教室終了時:

短時間であるが、道路や線路にある遊具に関して声を掛け合ったり、店主と客など役割を分担してお店屋さんごっこに発展したりするなどの姿が見られるようになった。

なお、この結果は、平成27年度学会報告を視野にビデオ分析を進めている。

表 平成26年度「つばさ教室」(幼児教室)で実施したごっこ遊び

実施日	「ごっこ遊び」の内容	おもな準備物
5/7, 21	ブロックを使った自由遊び	(なし)
6/4, 11, 18	買い物ごっこ 「車のおもちゃやさん」	・道路標識, ガソリンスタンド, 値段表 他 ・ミニカー, 道路・線路用ガムテープ
7/2, 16	夏祭りごっこ	・食べ物(やきそば, りんご飴, アイスクリーム他), うちわ, サングラス 他
10/15, 22	魚釣りごっこ	・海, 魚, 釣り竿 ・バケツ, 魚焼き台
11/5, 12, 19	ままごと 道路ごっこ	・ままごと道具, 調味料, 寿司, 果物他
12/3, 10	自由なごっこ遊び ピタゴラスイッチ	・ピタゴラスイッチ3種類

<p>成 果 の 概 要</p>	<p>12/24</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビンゴゲーム ・ 平成 26 年度終了式 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビンゴカード, 景品
	<p>(2) 「つばさ教室」(親教室)</p> <p>保護者間及び幼児と保護者間の関係形成については、母親への聞き取りとアンケート調査により行った。以下におもな実践内容やテーマを列記する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者が利用可能な福島市内の関係機関の紹介 ・ 小学校入学後に利用可能な福島大学発達相談室「けやき」の紹介 ・ 「就学サポートシート(福島市)」の活用と記入方法 ・ つばさ教室(幼児教室)における幼児の活動参観の視点 ・ 我が子へのかかわりについての振り返りと話し合い ・ 就学時検診の意義や内容, 質疑応答 ・ 感覚統合に関する講義とDVD鑑賞 ・ 在籍園訪問に関する了承依頼とその事後報告, 課題の検討 など <p>このような活動をとおしそれぞれの母親は、幼児への接し方や障害受容、就学に対する考え方やスケジュールを含む實際を学ぶことができたことと終了後アンケートで報告している。また、同じ悩みを持つ母親同士の連携に対する期待、各教室の研究員や学生スタッフの真剣さ、情熱に感謝のことばも多く記入されていた。</p> <p>(3) 福島大学発達相談室「けやき」との連携</p> <p>「つばさ教室」と「けやき」では、それぞれの教室における典型的なケースに関する検討と情報交換を行いスタッフの支援力向上に努めるとともに、今後の発達障害幼児支援に対する福島大学としての取り組みについて話し合いをおこなった。ケースに関する内容は個人情報を含むため、本報告には記載しない。両教室のスタッフが年間 4 回実施した。あわせて、これまでの「けやき」の活動をとおして、早期支援や大学による支援室の在り方など他大学訪問の現状も踏まえた情報交換や意見交換を行った。慢性的なスタッフ不足と予算不足はどの大学も共通していることが明らかになった。平成 26 年度は、福島大学発達障害児早期支援研究所では、研究員及び学生スタッフの参加、一般企業からの奨学寄付金を得て運営することができたが、平成 27 年度以降、今後の運営に関する課題とその解決方策について確認した。</p> <p>※個人情報以外の結果の公表については保護者の了解を得ている。</p>		